

デューイによる哲学の構想の批判的継承に向けて

* 鵜 飼 峻 二

- 一 はじめに
- 二 生き方を再考する責任
- 三 哲学の使命
- 四 おわりに

一 はじめに

1947年、「哲学の未来（“The Future of Philosophy”）」と題したコロンビア大学での講演において、最晩年のデューイは哲学に対するある希望を説いている。それは、哲学が人間の新しい運動を触発する営為へと変革するという希望である⁽¹⁾。デューイは、*Reconstruction in Philosophy* (1920)以降、この希望と共鳴するような哲学の再構築に関する主張を何度も繰り返している。しかし、その構想とは何かという問いに対する解答は意外にも不明瞭なままである。本稿の目的は、その構想を明らかにすることにより、デューイ的な哲学探究の方途を模索することである。

この課題に再考の余地があることを知らしめたのはリチャード・ローティであろう。ローティは*Philosophy and the Mirror of Nature* (1979)において、デューイの構想を、哲学史の批評活動を脱構築し、対話と啓発へと向かう試みとして読み解いた⁽²⁾。この読解はデューイ哲学の再評価に大きく貢献したが反発も多く、世紀末前後に多様なデューイ像を生むきっかけとなった。ローティ以後、デューイの構想を読み解くアプローチは大まかに二つに分かれる。第一が、社会変革に関する課題を強調するアプローチである。たとえば、ロバート・ウェストブルックとマイケル・エルドリッジは、アクティビストとしてのデューイの一側面に着目し、彼の著述と活動を、民主主義を実現するための哲学として読み解いている⁽³⁾。ラリー・ヒックマンは、デューイが科学と産業の発展について頻繁に

言及することに着目し、それを科学技術批判として読み解いている⁽⁴⁾。第二が、個々人の生き方の変革に関する課題を強調するアプローチである。このアプローチをとる代表的な論客はトーマス・アレクサンダーである。アレクサンダーは、デューイによる科学技術に関する言及はあくまでも目的のための手段に過ぎないとし、彼の批評活動の目的は生き方を再考することだと主張している⁽⁵⁾。

こうした読解はいずれも個別課題を強調し過ぎており、デューイの仕事を矮小化している。デューイの批評活動に貫徹する特徴とは二元論に対する徹底した批判である。デューイに寄り添いながらその哲学の構想を捉えるという本稿の目的を鑑みると、二元論的な構図を再生産する選択は好ましくないだろう。近年、現存する読解を包括することを念頭に、グレゴリー・パパスが、デューイの著述と活動を知性・美・民主主義への関心が相互依存する単一の倫理的理想 (a single moral vision) として読み解く提案をしている⁽⁶⁾。この提案はたしかに二元論的な対立を防いでいるが、デューイの仕事を全て倫理の問題に読み替えている点でやはりその構想を捉え損ねている。デューイによれば、問題に取り組む際、「特定の宗教や改革等、時代の流行の専門的な解決策」を採用することは「病を治癒する手段を用いてそれをさらに悪化させる」⁽⁷⁾。なぜなら、「専門的な解決策」は区画化 (compartmentalization) を推進し、興味と交流を分断するからである。デューイの哲学の構想を再考する際、好みの一面を称揚する選択によって区画化を推進することは、考究の開始点からデューイ的な視点と逆行するのである。

* 名古屋大学大学院学生

本稿ではデューイに倣い、始めから「専門的な解決策」を採用せず、最も一般的な経験の記述を参照しながら理解の進展を図る。この見方を可能にするのが *Art as Experience* (1934) である。本書の何よりの特徴はデューイがアート (art) を伝統的な範疇よりも広く想定したことである。アートとは有機体とその環境の相互作用によって創造される経験である。美術館等に安置されるいわゆる芸術作品とは、経験の創造過程において産み落とされる派生物に過ぎない。デューイはアートを芸術作品に限定すらしていない。「人間経験の歴史は様々なアートの発展の歴史である」という印象的な記述から示唆されるように⁽⁸⁾、デューイは、医学・政治・科学・産業・教育等、アートという語彙とは無関係に見える文化的活動も一種のアートと捉えている。それらが持つ差異とは、アート様式の分化の賜物ではあっても、アートとアートでないものの分化ではないのである。

デューイがこの独特のアート理解を採用する理由は、アートにおいては「現在の思考を煩わせている様々な乖離が消滅する」からである⁽⁹⁾。仮に対立を発見しても、それは「人類が自らの生を拡張する意図を持って自然の素材とエネルギーを使用する」営為における一時的な緊張に過ぎない⁽¹⁰⁾。ここにもデューイによる反二元論の態度が表れていると言えよう。デューイは、二元論的な思考からの解放を可能とするアートの観念は、「人類史上で最も偉大な知的功績である」とまで述べている⁽¹¹⁾。

デューイが構想する哲学を方法論的に一種のアートと捉えれば、その個別主題に囚われることなく考究できると筆者は考える。実際、*Art as Experience* (1934) においてデューイは哲学 (some philosophic song) をアートとして紹介する箇所がある⁽¹²⁾。とすると、哲学はあらゆるアート同様、何らかの形で「人類が自らの生を拡張する」努力において経験を創造する営為だということになる。それでは哲学とはいかなるアートであるのか。以下で本稿は、デューイによるアート理解に即し、哲学の特徴を抽出していく。

二 生き方を再考する責任

デューイの理解におけるアートの源泉とは関係性を意識する行為である⁽¹³⁾。「関係性」とは記号のつながりではなく、状況における相互作用の様式である⁽¹⁴⁾。端的に言えば、状況における何かしらの動向が知覚できる限り、そこにはアートの萌芽が見い出される。アートとしての哲学について考察するためには、哲学が何の「関係性を意識する」活動であるのかを明らかにす

る必要があることになる。しかしデューイによれば、哲学に先立つのは「過去の知識の諸体系と、問題設定の文脈となる文化的状況に関する可能な限りの最も広範な学識」である⁽¹⁵⁾。本節では、哲学が扱うべき課題に言及する準備として、デューイがこのように考える理由を明らかにしたい。

広範な学識が哲学に先立つ理由は、デューイが人類の蓄積してきた遺産を継承することに対する責任意識を持っているからである。デューイの仕事において責任が重要な役割を果たすことを最初に指摘したのは E・A・パートである。パートによれば、デューイの責任意識の背景にあるのは、人間の行為には必ず帰結が伴うという見解である。この見解を基にしてデューイがその著述で目指したのは、行為の帰結を明らかにすることにより、責任ある選択をする条件を整えることである⁽¹⁶⁾。以下の一節からはその見解を読み取ることができる。

癌は、活力の生長と同様に真正銘の生理学的な発達である。英雄と同様に犯罪者は社会的な発達である。法治国家からの全体主義国家の出現は一我々が好んだり認めたりするかどうかにかかわらず一社会的な進化である⁽¹⁷⁾。(筆者訳)

デューイは三つの事例(癌の進行・犯罪者の出現・全体主義国家の出現)を挙げているが、常識的に言って避けるべき帰結を一種の生長の成果だとしている。デューイはこうした帰結を肯定的に評価しているというよりも、思慮の有無にかかわらず、条件次第でそれが生み出される可能性があることを指摘している。仮に帰結に関する思考を放棄したとしても、それ自身が一つの選択となり、それに伴う公の帰結は波及する。とすると、好ましい帰結を生み出すためには、その条件を明らかにすることが賢明であるというのは言うまでもない。

もちろん、人間は「天と地の創造者ではない」ので、責任を負う範囲は限定されている⁽¹⁸⁾。個人々が「関心を寄せるのは」各々から始まる「全体の活動のうちの僅かな断片だけ」である⁽¹⁹⁾。それでは一体何に関する責任を負うべきであろうか。この問いに対して次のような応答がある。ヒックマンはデューイを通じ、責任を果たすような科学技術の開発が必要だとしている⁽²⁰⁾。ボイスヴァートは、責任に対する自覚は政治参加を促すとしている⁽²¹⁾。両者の主張は、たしかにデューイの仕事における重要な側面を捉えているが、本稿が依拠するアート理解に即して考えると一面的だと言わ

ざるを得ない。両者の見解のみを参照すると、あたかも科学技術の開発や政治参加しか責任を果たす選択肢がないように見えるからである。アレクサンダーが提起したような、生き方の変革に対するデューイの関心を考慮に入れると、科学技術の開発と政治参加以外のアートについても再考する必要があることが明らかとなる。デューイの関心が両者よりも広がったという見解は、次の一節から読み取ることができる。

なぜ言語を使用し、文学を培い、科学を習得し、発展させ、産業を持続し、芸術の洗練に従事するのか。このように問うことは、なぜ生きるのかを問うのと同じである。もし生きるならば、彼〔女〕は、それらを素材にして生きなければならない。分別のある唯一の問いはいかにそれらを用い、用いられるか、である。用いるか否か、ではない⁽²²⁾。
（筆者訳）

デューイがここで挙げている例（言語・文学・科学・産業・芸術）はいずれも特定のアート様式である。特定の環境下で生きるというのは、それらがある仕方で用いることである。科学技術の開発と政治参加が人間の行為の帰結を明らかにする責任の一端を担うという事実は疑いようがない。しかし、そのほかのアート様式をいかに継承するかという問いはそれでもなお残る。たとえば、日本語の使用という一種のアートを習得している者は、英語や中国語話者とは異なる文学や芸術に親しむ選択をするであろう。こうした選択の一つ一つは、アートの素材をいかに用いるかという選択でありながら、同時に、生き方の選択にもなっている。デューイによれば、長年に渡って継承されてきたアートの「遺産は、我々自身の環境を断続的に再創造しなければ、維持し、伝達することができない」⁽²³⁾。とすると、科学技術の開発と政治参加以外のアートに関心を示さないという選択は、哲学の責任を放棄することと変わらないのである。

どのようなアートをいかに用いるかという問いに対して賢明な選択をするためには、広範な学識を通じて検討する以外に選択肢はないように思われる。デューイは科学を高く評価することで知られているが、結局、その理由とは、科学が「検証された事実の論理的な要求を満たす、責任を自覚した想像力」を育成する有力な方法を提供するからである⁽²⁴⁾。もちろん、だからと言って、科学が無数あるアートのうちの一様式に過ぎないことを忘れ、科学以外は妥当性がないという見方を持つことは、「退屈な文字通り主義（prosy

literalism）のためにすべての想像力を放棄すること」であるとデューイは留保を付けている⁽²⁵⁾。

三 哲学の使命

それでは哲学とは何の「関係性を意識する」アートであろうか。この問いに対する解答は、結局、広範な学識によってその都度明らかにするほかない。本節では、便宜的に役に立つアート（useful art）と洗練されたアート（fine art）⁽²⁶⁾という二つのアート様式を想定することを通じ、哲学が扱う対象を一般的な構図において確認するところに留まりたい。

デューイは自然主義期の著述において、折に触れ、人類学的な知見を援用しながら、人間の生活は常に厳しい自然環境に適応する努力であったと指摘している⁽²⁷⁾。この過程において常に立ち戻る観念となるのは人間存在の不安定性（precariousness）である。デューイはこのように述べる。

過去から流れる未知の結果は現在をつつまわし、未来はさらに未知で危険である。そして、この事実によって現在は不吉なものとなる⁽²⁸⁾。（筆者訳）

原始的な人間社会においては不安定は露骨に顕在化するが、産業化等で整備された社会ではそれが見えにくい。しかし、文明の発達によって環境整備が進化したとしても、この一般の特徴は共通しているとデューイは述べる⁽²⁹⁾。アートが開始するのはそうした不安定に直面したときである。デューイは端的に、「アートは運の唯一のオルタナティブである」と述べている⁽³⁰⁾。つまり、自分自身の運命を偶然性に任せてしまわない限り、「関係性を意識する」営為に勤しむ以外に選択肢はないとデューイは主張しているのである。

不安定に直面したとき、異なる目的を持つ二つのアート様式を指摘できる。まず、環境を直接的に操作することで不安定を解消するのが役に立つアートである。役に立つアートの成果が整備されれば、好ましい環境が保持できる限り、帰結は再生産できる。デューイの理解によれば、居心地のよい環境を構築するためのあらゆる活動は、役に立つアートの功績である。次に、対象となる環境を直接的に操作するのではなく、代替する二次的の媒体を操作することを通じ、関係性を関係性として祝福するのが洗練されたアートである。洗練されたアートによって特定の関係性が祝福されると、状況における知覚は秩序付けられ、際立つようになる⁽³¹⁾。たとえば、戦争を直接的に体験しなくとも、書物・演劇・物語・絵画等を通じて想起する工夫はで

きる。この理解によれば、直接的に経験していない出来事について思考できるのは、洗練されたアートがその関係性を祝福したからである。

これまでの議論を踏まえれば、哲学が一種の洗練されたアートであることは明白である。より具体的に言えば、哲学は文学とともに言語を用いるアートである⁽³²⁾。以下の一節はデューイによる詩の経験についての記述である。この一節から、言語を媒介した洗練されたアートに関する彼の理解を読み取ることができる。

イギリスの批評家、A・C・ブラッドレーはこのように述べる。「詩歌とは言っても、我々は詩が現実に存在するものとして考えるべきである。そして、現実の詩とは、我々が詩を読んだときの経験の連続—音・イメージ・思考—である。そのため、詩は数えきれない度合いに存在する」。そして、「形式」—反応の仕方—によって読者は異なる経験をjするため、詩は、数えきれない性質と種類においても存在する。詩的に読むすべての人によって新しい詩が創造されるのである。結局、我々はお馴染みの古い世界に住んでいるので、詩の素材が独創的だというわけではない。しかし、個人は個性を発揮する。つまり、古い素材と関係性を結ぶ際の、見て、感じる仕方によって、何か新しいもの—それまで経験に存在していなかった何か—を創造するのである⁽³³⁾。(筆者訳)

仮にデューイが詩の「形式」を言語と同一視していたとしたら、この一節は言語の分析に終始していたはずである。しかし、デューイにとっての「形式」とは経験を創造する主体における応答の様式である⁽³⁴⁾。「形式」を形成するのは言語のみならず、その場での体調・天候・気温等、無数の環境的要因である。全く同じ状況に直面することなどあり得ないため、どれほど似たような状況であっても、創造される経験は毎回個性的である。言語が持つ意義とは、この一回限りの出来事を詩の経験として意味づける楔となる点である。詩と同様に、哲学と文学が言語を用いるアートであることを鑑みれば、両者が、特定の関係性を祝福し、ある「形式」を形成するアートであると言えるだろう。

しかし、デューイは哲学と文学を同一視しているわけではない。両者を峻別するのはやはり責任意識である。デューイによれば、文学では個性的な経験が創造できる限りにおいて「全てが許される」のに対し、哲学は表現内容の原因と結果について厳密な責任を負わ

なければならない⁽³⁵⁾。責任を引き受ける態度とは、前節で述べたように、アートの選択が生き方を形成するという自覚であり、賢明な選択をするために広範な学識を参照する努力である。

広範な学識によって哲学が疑問に付すのは洗練されたアートの停滞である。役に立つアートの目的は高い精度における環境の直接的な操作である。そのため、生産性の高い道具が開発されれば、新しい道具が古い道具とただちに取って代わられる⁽³⁶⁾。しかし、そもそも洗練されたアートの特異性とは、仮に環境が変化しても、同じ素材によって毎回個性的な経験が創造できるところである。したがって、新しい状況（未曾有の歴史的出来事・自然の脅威・新しい役に立つアートの開発等による）に直面しても優越した古い媒体が採用され続けることが少なくない。デューイはこうした特徴を洗練されたアートの「普遍性」として称賛する反面⁽³⁷⁾、アートが更新されないという停滞は無責任を生むと指摘する⁽³⁸⁾。なぜなら、普遍的なアートが祝福する関係性が先人の文脈において適切であったとしても、それがそのまま新しい状況の関係性を捉えているとは限らないからである。たとえば、プラトンは唯一の实在を明らかにすべく探究していたに違いないが、彼の著述によって二一世紀を特徴づけるグローバル化に関する課題を説明するのは無理があるだろう。プラトンの著作に普遍性があるとは言っても、その著述とは、古代ギリシア世界の「宗教的・芸術的信念を合理的な形式で体系化した」文化的産物に過ぎない⁽³⁹⁾。この事実を無視し、プラトンの議論に固執することは、新しい状況における責任ある選択を拒否することに等しいのである⁽⁴⁰⁾。

しかし、普遍的なアートにのみ目を向ける限り、遺産の問題点は見えてこない。そこでようやく広範な学識を蓄えた哲学の視点が活きてくる。広範な学識は新しい状況に関する検証された関係性を提示する。この視点を用いれば、普遍的なアートが祝福する関係性を批判的に検討できるだろう。つまるところ、デューイの構想する哲学とは、新しい状況における生き方を再考するために、広範な学識を用いて普遍的なアートの停滞の様相に関する「関係性を意識する」批評だということになる。この構想における哲学が達成するのは次の点である。ある普遍的な遺産に固執する者にとっては、それまで自明視してきた生き方の問題点を指摘されることにより、その頑なな習慣が揺り動かされる。デューイとともに新しい状況に眼を向ける努力をする者にとっては、哲学は新しい生き方を模索する指針となる。見当違いの見解は批評の応酬の中で変更させら

れるが、的を射た見解は、それ自体が参照されるべき遺産となるからである。

四 おわりに

本稿はデューイによる哲学の構想を *Art as Experience* (1934) におけるアート理解に即して明らかにすることが目的であった。考究の結果として明らかになったのは、デューイにおける哲学とは、継承された遺産を新しい状況の視座から批評することにより、それをいかに継承するかを検討する応酬だということである。この応酬自体が後世にとっての生き方の指針となる。

この知見によって以下のように先行研究の理解がくつがえされた。まず、ローティによるポストモダンの騎手としてのデューイ像の間違いが改めて確認された。デューイによる批評の目的とは新しい生き方を模索するための遺産の絶えざる批判的継承であって、そうした伝統を脱構築することではないためである。次に、ローティ以後の読解については、デューイ自身を取り組んだ主題（科学技術・美的経験・民主主義・倫理等）を取り上げている点で全て妥当だが、特定のアート様式における課題を強調し過ぎた点でデューイの構想を矮小化している。デューイにおいて一義的であるのは新旧の連結に関する応酬であって特定の課題ではないためである。

今後の課題を二点挙げる。第一に、デューイの著述自体をデューイ的な視点から批判的に読み解くことである。デューイの遺産がいくら普遍的だからと言って、それに固執することによって新しい状況を軽視する選択は、デューイの構想を拒否することである。その都度、新しい状況を察知し、その見地からデューイの遺産を批判的に検討する必要があるだろう。第二に、デューイ自身が想定していなかった文脈においてデューイ的な視点による批評を行うことである。というのも、デューイ自身の批評活動はあくまでも一つの範例に過ぎない⁽⁴¹⁾。哲学が取り上げる課題は、デューイ自身の著述内容によって限定される必要はないはずである。

【脚注】

- (1) J. Dewey, "The Future of Philosophy," *LW*, vol. 17, p. 469.
- (2) R. Rorty, "Philosophy Without Mirrors," in *Philosophy and the Mirror of Nature*, Princeton University Press, 1979, pp. 375-394.
- (3) M. Eldridge, *Transforming Experience: John*

Dewey's Cultural Instrumentalism, Vanderbilt University Press, 1998; R. B. Westbrook, *John Dewey and American Democracy*, Cornell University Press, 1993.

- (4) L. A. Hickman, *John Dewey's Pragmatic Technology*, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1990, p. 1.
- (5) T. M. Alexander, *John Dewey's Theory of Art, Experience, and Nature: The Horizons of Feeling*, Albany: State University of New York Press, 1987, p. xiv.
- (6) G. F. Pappas, *John Dewey's Ethics: Democracy as Experience*, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 2008, pp. 165-166.
- (7) J. Dewey, *Experience and Nature*, *LW*, vol. 1, pp. 224-225.
- (8) *Ibid.*, p. 290.
- (9) *Ibid.*, p. 269.
- (10) J. Dewey, *Art as Experience*, *LW*, vol. 10, p. 31.
- (11) *Ibid.*, p. 31.
- (12) *Ibid.*, p. 138.
- (13) *Ibid.*, p. 30.
- (14) *Ibid.*, p. 139.
- (15) J. Dewey, "Introduction: Reconstruction as Seen Twenty-Five Years Later," *MW*, vol. 12, p. 274.
- (16) E. A. Burt, "The Core of Dewey's Way of Thinking," *The Journal of Philosophy* 57, 13, 1960, pp. 406-407.
- (17) J. Dewey, "Time and Individuality," *LW*, vol. 14, p. 109.
- (18) J. Dewey, *Human Nature and Conduct*, *MW*, vol. 14, p. 143.
- (19) *Ibid.*, p. 143.
- (20) L. A. Hickman, *John Dewey's Pragmatic Technology*, Bloomington and Indianapolis: Indiana University Press, 1990, pp. 202-203.
- (21) R. D. Boisvert, *John Dewey: Rethinking Our Time*, SUNY Press, 1998, p. 26.
- (22) J. Dewey, *Human Nature and Conduct*, *MW*, vol. 14, pp. 57-58.
- (23) *Ibid.*, p. 19.
- (24) J. Dewey, "Philosophy and Civilization," *LW*, vol. 3, p. 9.
- (25) *Ibid.*, p. 9.
- (26) "fine arts" を「芸術」と訳さない理由は、洗練され得るのが特権化されたアート様式のみでは

- ないからである。
- (27) *Quest for Certainty* (1929) の第 1 章, *Experience and Nature* (1925) の第 2 章, *Unmodern Philosophy and Modern Philosophy* (2012) の第 1 章を参照。
- (28) J. Dewey, *Experience and Nature*, *LW*, vol. 1, p. 44.
- (29) *Ibid.*, p. 44.
- (30) *Ibid.*, p. 279.
- (31) J. Dewey, *Art as Experience*, *LW*, vol. 10, p. 153.
- (32) J. Dewey, *Experience and Nature*, *LW*, vol. 1, p. 305.
- (33) J. Dewey, *Art as Experience*, *LW*, vol. 10, p. 113.
- (34) デューイは、応答の様式について言及するとき、“way,” “mode,” “channel” 等、数種類の語を使用する。アレクサンダーは、方法 (method) という語も同様の理解をすべきだと主張している。方法と結果の誤った二元論を防ぐためである (T. M. Alexander, *The Human Eros: Eco-ontology and the Aesthetics of Existence*, Fordham University Press, 2013, p. 55.)。
- (35) J. Dewey, *Experience and Nature*, *LW*, vol. 1, p. 305.
- (36) ヒックマンは役に立つアートを科学技術と読み替え、1990年にデューイの著述を科学技術批判の哲学として読み解く研究書を出版したのは上記の通りである。ヒックマンはさらに、2001年に、デューイの著述を、探究の生産性を高める生産的プラグマティズム (productive pragmatism) として読み解いている (L. A. Hickman, *Philosophical Tools for Technological Culture: Putting Pragmatism to Work*, Indiana University Press, 2001.)。たしかに *Logic: The Theory of Inquiry* (1938) を基軸にすれば、このように読み解くことができるだろうが、生産性のみに着目すると、洗練されたアートに関する側面が見えにくくなると筆者は考える。
- (37) J. Dewey, *Art as Experience*, *LW*, vol. 10, p. 114.
- (38) たとえば、以下の頁に、無責任にたいする批判的な記述がある (MW10, p. 234; MW12, pp. 164-165; LW1, p. 324.)。
- (39) J. Dewey, *Quest for Certainty*, *LW*, vol. 4, p. 13.
- (40) デューイは、*Experience and Nature* (1925) の第 1 章 “Experience and Philosophic Method” において哲学の方法について議論している。この章の要点とは、どれほど受け入れ難い経験 (誤謬・幻想・迷信等) を発見しようと、それを人間経験の一つの可能性と理解しながら自らの経験を再考する題材とすべきだという主張である。デューイの思索のそもそもの開始点が特定のアート様式に固執することとは相いれないのである。
- (41) デューイの著述の中には、彼自身が哲学史に言及し過ぎていることを自戒するような記述がある (J. Dewey, *Experience and Nature*, *LW*, vol. 1, p. 37.)。

Toward a Critical Inheritance of Dewey's Vision of Reconstructing Philosophy

Shunji UKAI*

Although many scholars take up Dewey's works today, his meta-philosophical vision remains unclear. Scholars too often assume that Dewey's philosophy can be summarized by one of its canonical aspects, such as his aesthetic, social or ethical theory. Given the pluralism that Dewey consistently advocated for, it is highly unlikely that he was seeking for a totalizing ideal. However, it is also true that he did continue to argue for the need for a common direction for future thinkers to follow. This paper is a speculative attempt to clarify this common direction.

This paper methodologically makes use of *Art as Experience*, Dewey's aesthetic theory, to envision philosophy as a mode of art. This approach allows one to see philosophy as a cultural practice with certain generic traits rather than a professional field with a fixed set of problems. I begin the discussion by pointing out that, philosophy, in Dewey's view, is motivated by a sense of responsibility to decipher the consequences of human conduct. The thinker's task is to analyze those consequences and their conditions. The sense of responsibility leads Dewey to examine the philosophical tradition and assess the limits of past ideas. This is necessary because, while the intellectual heritage continues to be a resource for present-day thinkers, its ideas begin to fail to meet the needs of newly emerging situations. Thus, philosophy, as a mode of art, is a continued attempt to reconstruct its heritage to revitalize its effectiveness in responsible human conduct.

* Student, Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University